琉球大学学術リポジトリ

原稿 ：『植民及植民政策』第七章 植民地の社会的方面

メタデータ	言語: 出版者: 公開日: 2018-04-16 キーワード (Ja): 劣化著しい（植230～269） 資料形態 : B4原稿用紙／2綴り キーワード (En): 作成者: 矢内原, 忠雄 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/38393

矢内原忠雄文庫

史　料　名	原稿『植民及植民政策』第七章 植民地の社会的方面（植230～269）
封筒番号	463
原文所所蔵者	琉球大学附属図書館
撮影年月日	平成 17 年 11 月 21 日
撮　影　者	富士写真フイルム　株式会社
備　　考	

矢内原忠雄文庫

封筒番号： 463

史料名	原稿『植民及植民政策』第七章 植民地の社会的方面(植230～269)
資料形態	B4原稿用紙／2綴り
枚　数	40
頁　数	40
縦（cm）	
横（cm）	
厚さ(cm)	
書誌的事項	植民 劣化著しい 今泉分類記号： Y

琉球大学附属図書館

一 社會群の接觸
二 特殊的接觸
三 文化的接觸
四 社會的接觸

第七章 植民の社會的方面

第一節 植民の社會的視察

植民は社會群のすゝむ地域に於ける社會的經濟的作動である。その地域は全然無住地なることも有り得んども、通常は既に他の社會群によりて居住せらる。故に植民は社會群の接觸である。この接觸は植民者及び原住者双方の社會生活に影響する事大なるのみならず、両者を包蔵せる一新社會の成立發展を来らしむ。（デュボア）のいへる如く、植民の終極は二社會の融合して一の新社會となることである。而して如何なる程度に於て、又如何なる形態に於てその融合の行はるゝやは両社會群の社會的近似程度に依存する。両社會群の文明程度及び段階の略ぼ近似せる場合には融合は比較的容易に行はれ、然らざる場合にありては社會群の接觸は極摩擦多くして融合困難なる結果を生ずる。

社會群は同類意識に基く集團的精神により

Dr Dubois, M. Systèmes Coloniaux et Peuples Colonisateurs. 1895. P. 7.

積 29 社會群の独立性

て統一せらる。　この同類意識は当然に自己集団の優越性の主張、従つて他集団に対する自然的敵意を含むとの説[2]に対して私は同意しない。自己集団の特殊性、その存在の独立性の意識は各社会群に固有であつて、何等の抵抗を試みずして他社会群の侵害を許容するものは皆無である。今、植民によりて同一地域の上に相接触する二つの社会群は、特殊なる独立的存在の集団として相対立する。此の場合全然異交渉なる対立関係の維持は有り得ない。両者は必ず接触し、その接触は必ず両者の社会的存在の特殊性に影響し、その間に摩擦と抵抗とを生ず。而して植民者は他民族の居住地域に対する新来の侵入者なるが故に、必ずその独立的存在の地盤を占めんとする努力は、原住民に対して[自然]その独立性、特殊性の圧迫侵害となりて現はる。実質的植民が軍事的政治的権力による征服を伴ふことを多きは此の理由による。権力は新社会を懐胎せんとする旧社会の財産者がその所有を[命令]するに基礎である。[3]而して植民の場合の

2) Fouillée, A. Race from the Sociological Standpoint. (~~Spiller 編~~ Papers on Inter-Racial Problems. Edited by Spiller. P. 24–25). ~~私が彼の説に同意せざる理由は、例へば白色種族は黒人種族に対して自己の種族的優越性を主張するこにあるが如き、是~~

3) Marx, K. Das Kapital. Bd. I. (Volksausgabe). S. 680.

原住種族の衰退

植民に伴つて社会的脱落的現象

如き不自然なる人口上の方法になる外科的方法が用ひられた。殺戮又は駆逐である。即ち原住種族の

植民に伴つて原住者人口の顕著なる衰退を見たる例は史上に乏しくない。[1] 濠洲の土人、アメリカ及び西印度の土人の如きはその著例である。原住種族人口衰退の原因は戰鬪による殺戮の外、植民社会群との接触による社会的組織的諸関係の急激なる変更を挙ぐるを得る。先づ社会生活に就ていへば植民者による銃器火薬の輸入に基く種族間争鬪の激烈化、酒精飲料の輸入に基く弊害、天然痘、結核、花柳病等の輸入伝播及び異り

1) 不断の即席なる戦闘により南アフリカ境域の部落は人口稀薄となつた。タスマニヤの土人は最期の虐待により数家族に減じ、ついさへ六年以前(1833年)に附近の小島に移された。而も之れ銃をうつて、又は毒を混じたる食物を撒布して、彼等を森林中に殺せんとする特使者の手より救はんとの警戒的手段に出でたるものである。新ファウンドランドの土人は男女僅かに一組に減ぜられ、この二人も亦1823年に一植民者の為めに射殺せられた。西南沿岸の植民者はNO逃犯罪人脱走水夫等有中の有たる社会の要素漢にして、土人相互の感情を挑発して挑戦はしり、且つあらゆる種類の罪悪を彼に輸入した。アメリカの諸政府は、保護の下に自己の地域内に安住する異防衛の土人部落に対し要比の抑圧的手段を取つた。北米内地に於ては多数の勇敢なる民族が現実に吾人の眼前に滅びつゝあり。凡て之等を詳述するは心を痛めしむる業であり且つその必要もないであらう。(Merivale, ~~Colonization~~ ~~(1861)~~ P.487-488)

~~2) 例へば "Babylonian Captivity" に於ける~~ 植民人の強制的特徴なる国外移植、又は Cromwell の英人移植政策による Ulster 住民移植の実例参照。

(H. Lectures on Colonization and Colonies. 1861.)

(落々)

る衣食住の風習の模倣による他律的悪影響等は、土人人口の発展に対する有力なる障害であった。又植民者が彼等の先住する優良なる土地を占領することによりて、気候風土の不良なる地域に居住せしめらるゝことにより、土人の物質的生活は不利なる条件の下に置かれる。

経済的窮乏に於ては、植民者による土地没収は往々土人の生活の基礎を破壊するものであり、殊に奴隷制度の下にあ

2) 武器及び火酒類は未開土人の最も希望する商品であって、盛に欧人によりて アフリカ等の植民地に輸入せられた。Livingston すら武器の輸入散布を奨励した。(Frick. Die evangelische Mission. S. 276)。火酒類の輸入取引の盛なることは、アフリカ諸族の Neg なる伝道地に於て、四百人の伝人居住者中三百人以上は酒類商人であり、又は モロッコに於ては 1909年 1910年間に酒類輸入は倍加したること (Vignon, L. Un Programme de Politique Coloniale. 1919. P. 166)。或は英領 Nigeria に於ける輸入の八割を占むるは関税であり、そのうちの大部分は酒類関係である事実 (Egerton. British Colonial Policy in the Twentieth Century. P. 224) をみても知らる。酒精類は酒精中毒による体質の悪化、生殖力減退、懶惰等の結果、土人人口に不例なる影響を与ふるという。「国際聯盟規約第二十二条に於ては委任統治地域に於ける「武器若は火酒類の取引の如き弊習を禁止」す。

3) 「Grand-Bassam に於て黒人中の結核患者は人口数の 20% であるが、海岸より 350 キロメートル奥の未だ鉄道の通じない Bouaké に於ては その比率は 2% に過ぎない」。—Vignon. 前出 P. 166。天然痘流行による浸潤土人の減少。花柳病の太平洋諸島に於ける伝播。之等の「文明病」は、それ迄之を知らず、従って抵抗力弱き土人を著しく悩ました。

4) 「私が布哇で聞いたのに、Captain Cook の当時三十万人居たる土人が 1883年には約三万人に減少したのは、四周が長い草で編まれ、従て自然的通風の行はれて居た在来の wigwam の代りに木造の家に住み、或はこれまで腰布しか用ひなかった土人が衣服をまとふに至り、しかもそれが雨で濡れたる時に着換へたり又は乾かすを知らざりしことに、主として基くのであるという話であった」。(Bryce, Romanes Lecture. p. 32. quoted by Hobson, Imperialism. p. 222.)

りて先労働酷使による原住者人口の減少があつた。[1] ビュッヘリーは、原始的未開種族の多くが政府人との接触の結果衰滅せる原因は、近代的資本制経済の方法及び技術の輸入にありと考ふ。即ち、いしき資本制経済の侵入は彼等の自己満足的なる生活に甚しき動揺不安を生じ、且つ一方に於ては技術の輸入

は

はじめ在来の労働方法に於て彼等の心身を健全に維持せる適度の緊張の利益を失ひしめ、かくて彼等は「眞晝の熱に曝されたる日蔭の草の如く滅び行いたし」といふのである。[2] 併ら私は未開種族自身が資本制経済を模倣追求することによりてその神至系統を害し、或は又彼

1) スペイン植民地の鉱山地方に於ては十八才乃至五十才の土人は三年毎に六ヶ月宛労働に服するの義務を課せられたが、その労働は極めて苛酷にして徴募人員の五分の四は満期前に死したりといふ。(Morris. History of Colonization. Vol. I. P. 249-250)

2) Bücher, K. Die Entstehung der Volkswirtschaft. Bd. I S. 81.

295 植

等自身機械的生産を営むによりその心身の不断の使用の機会を失ひたりと見るは適当なる説明と思はなり。政治植民者はその営利活動のため必要なる労力をめ何にして未開土人の（土人）るより獲んかに苦慮したるは明白なる事実である。未開土人（土人）は自ら営利活動を学びたるか故にあらず、植民者がその掠奪的営利活動の遂行上未開土人を利用酷使せるか故に、彼等の人口は衰退したと見るべきである。

ダーウイン（Darwin）は異種族との接触による土人人口の衰退の一般的原因を生存競争に求めた。彼れ言ふ、「教化の明白なる衰滅原因の外に、更に神秘的なる或る力が一般的に働いて居る様に見える。政治人（苦くも）の足跡を印する要、死は必ず土人を追撃すると思はれる。アメリカ、ホリネシア、太望峰、濠洲の廣汎なる範囲に亦（亘り）同様の結果を見出すであらう。又破壊者（たる）もの（マレイ）は必ずしも白人に限らない。事実系統のポリネシア人は東印度諸島のある部分に於て黒色土人を駆逐し去つた。人類植民は商物の

衰退原因
種族の衰退は植民に伴ふ必然なりや

296

植

鍾と同様の方法に依れば、即ち黄は弱く、黄は強し。

この由来、科学的に説明すべき性質の生存競争は、自然力の物理的作用に基づく。

生存競争は、種族の保存に対する種族の愛情と、異性を求むるの性質とは、種族の生存競争の必要上、生存競争の必要上、生存競争の必要上、

持、衛生（医療）の設備、経済生活の繁栄等を計るに
於ては原住民人口は却って増加有利なる状況
の下に置かるゝものであるが顕著なる増加を呈
し得る。

政策による異半在競争による種族の保護は、併乍ら又同
時に必ずしも常に弱小種族の増殖を来たらし
めない。アイヌは減少の傾向を示し、アメリ
カ（インディアン）に就ても亦人口は停滞状態にある。[1]
敵種族は寧り且つ滅亡んだ。政治人がアメリ
カに来りなる時に接触したる土人（Indians）は前
世紀に栄えたる大種族の消え残りたるものに
すぎない。
ある人類学的に種族的老齢の説を
為す者あり。老齢期に入れる種族は植民者と
の接触なくとも衰退の方向を辿れるものであ
るが、強烈なる他異族の侵入接触によりその
衰滅の趨勢を速めらるゝものと為す。斯くの
如く活力弱き種族は生存競争に最も堪え難き
ことを云ふ迄もない。一の興味ある仮説である
。[2]

1) 北海道に於けるアイヌ人口、大正8年 17,099, 大正9年 16,720, 大正10年 15,941
米国に於ける旧土人人口、明治42年 2,108, 大正3年 2,078 大正8年 1,965. 大正12年 1,789
合衆国に於ける Indians 人口. 1837年 302,498 1922年 342,917.
2) Merivale 前出 P.547—549. Mieses, M. Zur Rassenfrage. (1919.) S. 166 参照

植民者種族の興隆

植民者種族に就て見れば、抵抗多く活動の自由廣き新しき地域への移住は、海洋との接触の如くその生活力を著るしく刺戟する。其の土地豊富にして生産力大なる植民地にありては経済的繁栄の機会多く、従つて人口の自然増加に有利である。欧洲諸国に比して北米植民地の人口増加率の急速にして二十年乃至二十五年に倍加すると申事実はアダム・スミス及びマルサスがその人口論の基礎とせる古典的事実であつた。[1] 直接なる環境に於ける植民者は種族たりに

数量的に人口増加するのみならず、その活力に於ても飛躍的に発展するが如くである。米国に移住せる諸種族を見よ。而して遺伝学上の突飛性変化（mutation）、即ち突飛急激の変化却りて遺伝物質の新生を伴ふ事実は、その原因不明なれども例へば不良なる種子を適度に豊饒なる土地に蒔くが如き場合に於ては実々突然性変化を現はすといふ。[2] 果して然らば植民に伴ふ種族的遺伝物質の新生を想像することも単なる空想ではないであらう。

1) 「英国その他欧洲諸国にては人口は五百年以内にては倍加しないと想像せる。北米に於ける英国植民地にては二十年乃至二十五年に倍加することが発見せられた。現代に於ても此増加は主に野蛮なる原住者の絶えざる移入に負ふよりも、むしろ大なる自然的繁殖力に基くのである。老年まで生くる人は屢々五十人乃至百人或はそれ以上の子孫の生まるゝを目撃することがあるといふ。労働の報酬が良好であるう故に多数の子供を持つことは両親にとりて負担でなく却つて富裕と繁栄の原因である。」(Smith, A. Wealth of Nations. Vol. III. P. 72).

2) 永井潛 生命論 P.408.

植民者の種族的繁栄はその種族全体の生存維持に資する事実がある。たとえ其種族の母幹は衰微するも植民による枝が栄えて全体種族の命を後代に傳へ行く振きがある。フェニシアの衰へたる後カーセージが殖り、ギリシヤの衰微したる後シチリーにその文明は残つた。アングロサクソンは米国及びドミニオンの発達によりてその種族的基礎を鞏固にした。若し英国が衰微することありても英人種は政治以外に於てその国とその文明を有するであらう。（ウォード）は植民を以て種族保存の一形態なりとする。彼曰く、「種族や民族も發達極まつて衰滅に赴く。國民は分化の極、周圍のより剛健なるものの容易き餌食となり、高度の文明は常に衰亡の危険を含む。種族や國民は常にその最も活力ある分子を送り出して新しき地に移植し、而して母國は衰微し又は併呑せられて行く。……有機論者は植民を目して社會的生殖の現象なりといふ。されば少くとも半の真理を含む。植民は屢々新生を意味する。それは種族の発展を意味し社會的進化を意味する」。[2]

（近世植民史に於ける種族移殖の第二期）

植民に伴ふ異種族接触の歴史に二期を劃するを得る。その第一期は十五世紀以来西欧人が

2) Ward, L. F. Pure Sociology. P. 78-79

有色人種の地に対する白人の植民地

アメリカ　既に以東の地に植民せる時代であつて、為めにアメリカ・印度（インディアン）人、オリヤンシア人の如きアフリカ黒人の如きは種族的壓迫を受け、中には衰滅に陥りたるものもあり、之等に代りてその地域に白人社會が建設せられた。第一期は十九世紀末以来にして、かくして建設せられし白人社會の新領土に對する印度人及び土人の移住をその特長とする。（第一期）十八世紀

自由人の移住

に於ては、アメリカへ移住せる欧洲人の人口は増殖の著しかりしが如く、第二期に於てアメリカに移住せるアジア人も同様の理由によりて其人口の自然増加は急速である。例へば合衆国太平洋沿岸諸州居住の日本人人口は一九一〇年の国勢調査に於ては九万人であり、二〇年に於ては一九万人に達し、最近一ヶ年の出生約六千人に達するといふ。而して移住者の人口増加が旧来の居住者即ち第一期の植民者たりし種族に及ぼす影響に関し、「種族は貨幣に関するグレシヤムの法則に従ふ、同一場所に於ける二種族中劣等なるものは用ゐる所に於ては優等なるものに入り代る傾向を有す」とのべし、前者が後者を駆逐するとは

1) 地猶、米国の日本移民問題に就て（経済学論集第三巻第一号、P.129）。

得ると一しても、我は其の言説は固雖いあると思ふ。

ある白人種の混淆と、同一国家と言説し、力を以て黄人を黄人自己の国土より駆逐する

人種の優劣を感ずるに至つた事である。「黄色人種の手住繁殖に対する白人は主や他の有色人種に対する

ものである。

黄人に加へたる影響に比べて如何なる平和的

侵略を以て、他人種の国家を放棄せざるを得ない事は、

[illegible]

[illegible]

[illegible]

であろう」とは一体国家者の恐怖である。米国及び英帝国者ドミニオンの有色人種排斥の枝葉は正に白色種族の防衛戦線である。若し同一種族の堅倒的文明が永遠に亘るものなら、せめて歴史はその単調さに堪えなりであろう。

混血は又種族混血の母である。同一地域に於ける種族の蕃殖は単なる対立関係に終始するを得ない。対立関係は動いて融和統合の方向に移る。而して親婚は種族社会の結合である。人類各種族は動物学的に云へば本来一種に属しまたことが認められるといふ。[2] また現在地球上に多数を異にせる諸種族の存在すらは環境及び混血の影響に基く。而して現存各種族は一として純粋なる系統的血液を保有するものなく

1) Grant, M. Introduction to Stoddard 前出. P. XXX
2) Tylor, E. B. Anthropology. P.66. Mieses. 前出. S.161.

人類学者は動物学的にいつまで本来一つである。人類学者は動物学的にいつまで本来一つである。

しかし種族は絶滅後対立の統合の過程に於ける種族の接触は異なる。

り編入せられし黒人、及び原住種族たるアメリカ・インヂアン相互の雑種は現代に於ても中米及び南米諸国人口の重要なる構成分子たる地位を占む。[1]

混血の結果

混血の結果に就ては相反する二説あり。之を不良なりとする説と、首唱者はゴビノーである。彼は文筆を以て種族的特徴に基礎を置き、即ち種族に先天的優劣あり、

不利説

の差を認め、且つ種族の活力をその純粋性にありとなす。彼は最盲目的に白人種族に対し、若し各種族間の混合雑婚するが故に、未開種族が最も劣等なる黒色及び黒色に近ける黒色なる純粋なる白人種族は永久に白人に隷属すべし、と主張し、彼は人種的偏見に囚はれたるものである。[2] 彼は混血の弊害を悉く不利なりとするものにして、例へば混血の行はれたることを憎しむべき状態であるけれども、実際には混血の行はれたることを認めて

1) 十九世紀後半時代に於ける之等各国の人種別人口割合（百分比）を Keller は Roscher に基き下の如く表示す。
(Keller, Colonization. P. 218. Roscher, Kolonien usw. S. 148.)

	白人	Indians	雑種	黒人
Mexico	12.5	60.0	27.5	雑種に含む
Central America	5.0	56.0	38.0	1.0
Panama	5.5	7.2	87.3	雑種に含む
Ecuador	8.0	50.0	不明	不明
Peru	14.0	57.0	29.0	雑種に含む
Venezuela	27.5	23.3	44.0	5.2

2) Gobineau. Versuch über die Ungleichheit der Menschen. Bd. I. S. 282.

血によりて白色種族は先天的に欠くる藝術文
学感覚の世界を改善進歩し得べく、殊に本等
種族は優秀種族との混血によりて改良向上し
得べく、之れ亦喜んで承認すべき奇蹟である
が、同時に優秀種族は比り混血により堕落す
ることを認めざるを得ない。頻繁なる混血は
同一種族内に多種血液の不統一を惹起し政府
的状態を来たすが故に、本来種族に混じら
れたる優等血液もその能力を失ふべく、又優秀
なる種族との混血繁殖を重ぬる優良種族な
そ

の血管中に流るゝ祖先の純粋なる血液の薄ま
るに従ひその優越性を失墜する。[1] 之れゴビノ
ーの学説にして[2]十九世紀後半に於て多くの信
奉者を生じた。而して異種族混血の不良を主
張する論者はスペイン植民地に生じたる前記
混血種族の頽廃退歩の事例を引くのである。[3]

之に反駁する学者は種族の先天的優劣を認
めず、従て混血は何等不利なる合理的基礎な
きのみならず、種族の活力保存の上に却て多
大なりと述ず。ウオードは性による繁殖と細

1) 同上 S 283－285.
2) Finot, J. Le Préjugé des Races. P.16 以下を見よ。白人優越説は Chamberlain, H. S. "The Foundations of the Nineteenth Century" に於て最も極端に発揮せられた。Stoddard の如きは Gobineau を尊敬し共鳴する者であるが（前出 PP. 200. 228）併し白色人種と有色人種との対抗を力説する点に止まり、寧ろ白人の優越は1900年を以て絶頂に達し、その後数年にして旅順口外に響きたる日本人の凱声は白人の勢力の下り坂を告げたるものであるとなす（P. 153）。後者は Gobineau の攻勢に比し彼は飽迄たる防禦の陣である。共に独断的感情論である。しかも甚だ何たる時代の変化！
3) Stoddard, 前出, P.116 以下

胞分裂のかき場合とを比較し、後者は單調なる自己そのものの再生なるに反し、性の作用は異りたる個性の融合（による創造性）により。種族も單調なる自己そのの再生をえてしては早晩停滯老衰の時期に到達すべく、之に反し混血の頻繁なるに從ひその内に萌へうる個性の工夫により多種豊富となり之によりて種族の活力を進捗せしむ。混血なければ適性化なく發達なし。最も有力なる種族は過去との連絡を失はずしかも他種族との不斷の接觸を保てるものである。

「社會的原形質の連續が高等なる血液の反覆混合を伴ふ時社會的能率及び成功の最大限が達せられる」。

とあす。マクドウガルも亦、社會的同一種族的構成及び種族的純潔は同胞生活の安定を生ずるも、同時に偉大にして独創的なる精神を生あべき変化性を失はしめ、從て初期の状態以上に進歩すべき能力を失はしむとあす。雜婚の結果は種族の繁殖力に對して不利ならざる実例も多く挙げらん、白人と黒人の如くかけ離れたる種族間の混血（により）も繁殖力の増加せることが指摘せらる。（中米及び）南米諸国に於けるス

1) Ward. Pure Sociology. P. 232
2) 同上 P. 214
3) McDougall, W. The Group Mind. P. 141.
4) Finot. 前出. P. 256 以下. ~~Nieves 前出~~

ペイン系の雑種を始め、アフリカ、アジアの活地獄に生じたる雑種の道徳的頽廃の事実に就ては、その原因は自然淘汰混血そのものの不利に基くよりも寧ろ混血児に敵する社会的偏見にあり、白人は彼等を軽蔑し土人は彼等を嫉視する社会的情に基くものである。と説明する。[1]

以上の如く種族混血の結果に関して相反対する両学説があるが、直説は左に帰するものの如くである。即ち甚しく相異る種族間の雑婚の結果は強んとれての場合に於て不良なるものの如くも、又之も甚しく相異らざる種族間の雑婚に於ては体力及び特殊的能力に就て良好なる結果を生ずべしと。[2] ウオードの如き混血政策者も、良好なる混血は同種に属するものの間に於てのみ行はるべく、現今の文明種族と野蛮種族との間の如き異種族間に於ては真の同化は在せずといひ[3]のである。マクドウガル[4]は相近似せざる種族間の雑婚の不良なる結果は体力及繁殖力の減少及び智的並に

1) Finot 前出 P.261–263. Mieses 前出 S. 172–176.
2) McDougall 前出 P.140. ~~242–243.~~ Sausseure, 前出 P.64.
3) Ward 前出 P.215.

混血

精神的性質の調和は混血の一の欠点にありとする。[1]

敏捷力の点に関しては反対の学説多くあり、精神力の点に就ては之の欠陥を認むるものの点に物する所の記述が存在しない。

併し之は或に[事実]の如くして社会的存在なる故

に物一得ると一つも、社会生活の立場より見れば、単に自然的法則と同じく或は之も以上

に重要なる影響を及ぼすは社会的事情である。

[之等に関する以上に]

[社会的文明]の[人種]的特徴の近似[社会的]相続的[特徴]。

階級の近似が、[種族]の[特徴]の[結果]に[基]して[相]

思ふに混血の結果は両種族が略ぼ同等なる社会的地位を占むるか或は近似の人種的特徴を有することに良好なるべく、然らざる場合には、たゞひ自然に[おのづから][遺伝]の[法則]に[従]ふ。

終局には何等正常なる理由なしとするも、社会的原因により非難[不健全]なる淘汰を免れないであらう。

[以上]

[人種]は[人]の[混血]の[結果]は[人種]の[混血]の[結果]は[人種]の[混血]の[結果]は[人種

植

629

満鉄社員の研究

満鉄社員の研究

例えば社員の研究と言うものは、研究社員の研究と言うものは、研究社員の研究と言うものは、研究

程の差違が甚しき時は、急激なる異種文明の侵入により、勇健社会祥の旧文明破壊せられて新文明未だ起らざるの混乱的状態を現出する。

植民は又移住者の社会生活、その文明形態に影響を及ぼす。自然的及び社会的なる環境は之に変化と活力とを與へるであらう。移住者の植民地に於ける活動は、新しき土地に接触せる刺戟と、傳統的慣習や社会的團体論の束縛を破らざることと、経済的繁榮の機會多きことによりて、その故國に於ける活動に比較して精力的であり、自由であり、且つ實驗的である。故に植民地に於ける社會的發展の速度は急激であり、植民者の氣風は粗野なるまでに自由であり、而して植民地は各種社會制度の實驗場たる觀を持つのである。

二

植民地は文明の趣味、申来社会科学は自然科学に比して實驗の便宜を有しない。蓋しその研究の對象が人類の社会生活にあるが故に、傳統的勢力の拘束と失敗の場合に対する考慮とは大規模の社會的實驗を困難ならしめる。然るに植民地に於ては植民者は新たに社会生活を開始するものであるから、その活動は新思想制度に関し實驗的であり得る。この實驗によ

りて文明に創造的進化を生ずる。

十四世紀頃の

永き南米（パラグエイ）に於てのジエスイット派僧侶により建設せられし全然共産的な土人共和国なる共産社会の一大実験であつた。

現代パレスチナに於て行はるゝユダヤ人のシオン運動はユダヤ文化の復興に於て、民族的郷土の建設に於て、又国体的無産階級の共同的生活の試みに於て、社会的実験場の観を呈する。

更にアメリカ合衆国の文明は既成文明にもあらず、将に成る新しき文明を生ずる実験的過程なりとする。

相接触する異種文明は部分的の接近摸倣の程度を経て融合同化するを得るや、又同化の程度を経て融合同化するを得るや、

異種文明の同化

は望ましき事

七、八

1) 尚、例へば土地増價税が独逸本国より先んじて膠州湾に試みられ、都市計画が日本内地に先んじて旦北、長春、大連等に試みられ、国営保険が英本国に先んじて ~~米西洋~~ ~~New Zealand~~ ニュー・ジーランド 満洲国等に於て実施せられる如く、財閥資本が先ず植民地に於て実現せられし例は少くない。

まゝ結果を生ずるや。文明の基礎を種族の先天的特質に置く（遺傳）論者は之を否定し、（純粹の）論者は、ゴビノー等の論者は、種族

が不変的なる以上文明も亦変化する能はず、同化選擇の力を無視する誤謬に陥れば、本ト種族より成る混血的文明を生ずるが、

その結果は混血の不良なる結果に度し本身

ありと為す。之に反し種族の特質に従つて文明

の特質を以て環境の影響なりとなす論者は、

桂氏に伴ふ文明の同化（その）可能及び有利を主張

する。此問題の解決は桂氏地の実際問題に於

て同化政策を取るべきや否やの理論的基礎を

決定するものである。

二

近代の生物學（遺傳）によれば種の変化には三態樣

あり、(一)外界の変動に基く変化、(二)遺傳物質

の形なる流行に基く変化、(三)突然及び性変化である。

生物は外界の影響により之に順應し一代

の間に形質の変化を生ずるか、併し之は一

代限りのもので後代に遺傳せられない。之に

形質の変化は遺傳せられない。（而して）混血及び不明の事由に基く突然

性変化による形質の変化は遺傳するものであ

るといふ。[2] 桂氏に伴ひて此の三種の変化が行

1) ~~永井潛、生命論、P.411.~~ Gobineau を始め Saussure, ~~Mieses~~, Vignon 等は遺傳に重きを置き、~~So~~ Finot, Mieses 等は環境に重きを置く。Mc Dougall は種族的特質の遺傳性の問題に関する彼の記述を概括して曰く、「種族的性質は極めて永続的である。併しそれに拘らず又生活条件が甚しく変化せる場合、例へば移住、気候の変化、社会背景、殊に混血~~等~~人口の如き場合に於ては徐々に変化するを免れない」と。(Mc Dougall, Group Mind. P.121).

2) 永井潛、生命論、P.411.

は
ナ
一
而
ば
ち
ゝ
ば
ゝ
ば
ゝ
ば

同化は原因型にまで徹底するか

次の問題は外的特徴の変化に止るや、或は真田型から眞正の同一型に帰するやの点である。事実は明白に現象型の変化を伴ふと直に真田型の変化と同視すべからざるを示す。アメリカ合衆国に於ける黒人は言語を同じくし宗教を同じくし生活様式を同じくし、何年祖を享有し、居住の歴史も古いけれども、彼等は白人と同化したるものと認むるを得ない。黒人は洋服を着洋食を食ひ英語をやつる印度人はその英語を以て英国人を抑圧する。ハイチ(Haiti)の黒人が

社会評文明の同化は現象型から

改洲人によりて文明的諸制度を悪へられたるに拘らず、一度び自治に委ねらるゝや忽ちにして野蛮状態に復せるは顕著なる例として列かるゝ所である。環境は生活に影響する。併ら生産を創造し又は決定するを得ない。外的生活の変化を助て生産の変化なりとし、又は外的生活の変化を通じて内的生活を変化せしむるを得ない。人類の進歩は根本的にあらず。絶対的に解釈を不可能ならしむる深淵の其面になしない。絶対的の優劣なく、絶

(SMH A…1) 10…20

1) Saussure 前出 P.204以下　McDougall 前出 P.117.

社会は民族的要素の代償(コンプレックス)である。

山賊の砦をもつ者は人民を支配する。

有力な諸侯の領地に対抗する力を持つ。

地方は人民を支配する。

[illegible]

[illegible]

[illegible]

即ち、

固定的なる支配階級の存せざる新社会に於て、各人労働の成果富を為すに容易なる如き条件の下に於ては、社会は平等的となる。米国はその著例である。カロライナ州の如き、主政復古に際し、チャールス二世によりて自己の寵臣に與へられ、之等の領主は封建的貴族政治を施行するの目的を以て、特にロック（John Locke）に依頼して憲法を制定したるほどのもの（その趣旨の実践力）であつたが、秋収に於てすら、その社会の平等的傾向に圧せられ、所謂ロック の大綱（制定せし）（Grand Model）も、二十年間成文として紙片の上に遺つて居たが、其後は世の笑物と成り果た。（移住植民地の社会構成の民主的平等なる体を示す一例である。）（スワン・リバー（Swan River））

（移住植民地の社会構成の民主的平等なる体を示す一例である。）

植民地の建設せられし時廣大なる土地の主なる出資者たるピール（Peel）氏に率ひられたる。彼は五万磅と三百人の労働者とを伴ひて渡航したといふことである。然るに之等の労働者は悉く自然的労働の並み外れて軽微なるこの地方に於て、土地所有者となるの見込みは容易なのに引きつけられた。かくてピー

（5行目 A…1）

1）武藤戸輝造、米国建国史要、P.115-117.

(SAB印 A…1) 10…20

此のスペイン人（gachupines）の興上位の階級も

あるが、スペインの植民地に於ては、獨逸人

すると指示するものとなる。

信仰、信教、言語、習慣、その他の特徴と以て

ありつゝ、獨逸の慣習は、また、また、[illegible]

九せた、和手の英国人社会、同様、その主の特徴

本質及び方向の[illegible]階級的構成を有する十

因なり、と一応、心し、たが、彼の理想とせる、資

[illegible]人、[illegible]二大[illegible]

[illegible]獨逸人、[illegible]

[illegible]（Democracy）とも又、獨逸人迫

[illegible]民主的政治の不足と

[illegible]、Wakefield は、植民地に移住

[illegible]、[illegible]

[illegible]、Wakefield の[illegible]

[illegible]

[illegible]

巨進んで一般的に社會に於ける階級の成立は種族の

すると社會の例に漏れず生ずる。

接納に伴い文明人に

古多き文學者の定義を獲得した。

生れつき人間の人間に

別待遇と受ける創は多い。

所で、実は作住を墳墓せらる一等階級的生

所でも手間賃位者は改良上の種制もモノ丸

一本に過ぎない人間と獲得した。

ヒリ人間級も異に人間の人間の

して異人、イニシアチブ眞下の階級に有る

生れつき人間の人間の人間の

古多き文學者の定義を獲得した。

次には種子地

基くといふを得やう。ラッツェル曰く、「多くの場合に於て、種族を論ずるときはむしろ之を階級といふを勝れりとする。凡ての場合に於て體軀上の相違が階級區別に伴ふ、而して文化と自由より遠ざかれるに從ひ、此の階級的區別はより嚴格である」。[1] と。グムプロヴィッツも曰く、「國家内の職業上の主たる階級、即ち貴族若くは武士階級、農民階級、及び商人階級はその起源に於てはすべて異種族より成立した」。[2] と。即ち貴族及び武士階級は征服者たる種族より成り、農民階級は被征服者たる種族より成り、而して商工業者の階級は第三者たる種族の平和的移住によりて成立せるものと認められる。かくの如き階級成立は固はにまた文明の濫觴である。蓋し征服階級はこれによりて自ら生産的労働に從事するを要せず、他階級の労働の所産を以て自己の経済的欲望を充足するの地位を得来るに至りたるが故に、專心経済的以外の活動に從事し得べく、且つ職業的分業の成立せる故集團的社會生活の能率高まり、その内容は複雑且つ高度となる。かくて文明は起り又進化する。種族の接觸による階級の成立は又固はに國家の発生の典型的範例である。自然的社會に於ては權力関係なく、

1) Ratzel. Anthropogeographie. S. 591.

2) Gumplovicz. Rassenkampf. S. 216.

Miesesは之を立証すべき多くの実例を挙げて居る(Mieses. S.119-131).

従つて国家は成立しない。

命令は、よしんば絶対的にあらざるにせよ、最も顕著に最も典型的に異種族征服によりて生ずる。グムプロヴィッツ等の社会学的国家観は本質的に正当である。彼曰く、「国家及び文明の起源を論じて曰く、「憐れむべき野蛮族！」彼等は未開の種族である。彼等の郷土たる土地は富饒多産であり、彼等の森は鳥獣に、流れは魚に富む……彼等見身は高貴経験であり賢智である……知るに足れり、今や

獣よりも更に力強き敵、即ち力と熟練に於て彼等を凌駕する人種の彼等に迫り来る……かくて最初の戦闘はより弱くより未開なる彼等の最初の屈服を以て終る……最初の文配と共に最初の国家は始まり、最初の国民は成立の過程に上る。征服せられて今や奴隷道徳御に従ずせしめらるゝ弱者種族の汗は文明最初の萌芽をうるほし実らす……最初の不法を以て法は始まり、最初の重行は凡ての文明の始めである」と。

1) Gumplovicz. Rasse und Staat. S. 41—42.

32

極

種族の歴史は一定の型に基く国家の発展は永遠に固定せざるべからず。

然るに今日の世界は一国一国の独立を維持し、各国の利害相反し、殆んど相侵略せんとする有様なり。

而して国家の発展は、外に対する侵略と、内に対する統一との二方面に於て行はるるものなり。

侵略は、他国の領土を奪ひ、其の人民を奴隷視し、其の資源を開発して、自国の利益を図るものにして、之れ国家の発展に伴ふ必然の現象なり。

統一は、国内の人民を、一定の主義に基き、一定の目的に向つて、一致協力せしめ、以て国家の発展を図るものにして、之れ亦国家の発展に伴ふ必然の現象なり。

而して国家の発展は、永遠に固定せざるべからず。

然るに今日の世界は

子孫の奪還は生涯続に
独逸人は延度しまつたが
ルツ伊太利人福左
て東は人代せんん東伊
ルと共に、勇ましく特色ある
ドイツ人は、
支那は
アメリカ合衆国は
ロシア、
日露戦争、
日清戦争
ロシア
ドイツ
ルツ
ドイツ
ルツ
ドイツ
ルツ

の共和国主義一般の政体と大差なし。

英国は、一方に於て、人民の自由を認めたるが如き、ドイツ、オーストリアの如き、絶対的政体と大差なし。

米国は、一方に於て、人民の自由を認めたるが如き、ドイツ、オーストリアの如き、絶対的政体と大差なし。

判例は、法律の社会的定義、即ち、人民の自由を、法律に、之を法律の範囲内に、

前年に就て要視的の意見である。

然るに統治の実際は甲に比して一と放棄する事実に於て印度人の信用を得ない印度人の信

しかも統治の実際は甲に比して一と放棄する事実に於て印度人の信用を得ない印度人の信

[illegible]

[illegible]

[illegible]

大なる結合力（の作用により、）英国と印度とも、善につけ悪につけ、年々一層密切に接近せしめらるゝことに一縷の望みをかけた。[1] 英国植民地の拡張沿革の実際家として有名なるクロー卿も、印度人の文明と社会生活の破壊とを痛感し、而して再び印度文明を建設するたつては、之を東洋的基礎の上に置くべく、そう方法としては自治的責任内閣制の賜与によらずして英人との接触による英国の模倣的政治形態の導入による維持によらざるべからずとし、

二

その理由として種族階級宗教等の相抗争する印度自体の無力を挙ぐ。[2] 英国人と印度人とは果して接近の度を高めたるや。英国のマーの印度改革意見は事実上貴微し得たるやいなや。否。印度人のスワラジ（Swaraj.）要求の運動は世界大戦（戦争）を機として盛となつた。スワラジとは英人を撤退せしめ吾々だけで別箇の存在を維持し得るかの如き状態である」。[3] ダス（Das）等の国民主義者も、ガンヂー（Gandhi）等の非協力主義者も、その目

1) Seeley. Expansion of England. 1902. P. 305-306.
2) Cromer. Ancient and Modern Imperialism. 1910. P. 119-129.
3) Gandhi, M. Freedom's Battle. P. 97.

的とするはスワラジに関して、

大い目的到達の手段として、

前者は印度憲法の下に於て、

後者は英人政府の

後者は英人政府の

施設に無抵抗的非協力の態

度を取らんとするのみ。

ンガーの非協力主義は議会

室廃止等に対する不参加

の外官位称号等の返還より

退学せしむること、外面的

品の非買運動（スワデシ）等の

運動を起す。[1] 学校は軍隊負

や政府の使用人養成の工場

である」[2] の故に、児童

は之より退学せしめて、

さび野外でありても印度人

の学校に於て印度の教育を

受けしめよ。又外国製の織物

物の代りに、「百年以前迄

の極味の高手加賀蒲

さり

1) 1920年九月カルカッタに於ける国民会議の非協力主義の決議は下の條項を含んだ。(Gandhi, 前出. P. 219以下. Bryant. J. P. Gandhi and the Indianization of the Empire. P. 83—85.)

1. 称号 名誉職の返還及地方政府の官職辞任
2. 政府の儀式等宴会等への出席拒絶
3. ~~児童の~~ 学校児童の漸次的退校
4. 漸次司法官は法廷に出席せぬこと
5. 軍人官位及び官僚階級のメソポタミアに於ける服務に対する徴募拒絶
6. 改革後の議会選挙の候補撤退
7. 外国商品の非買 (Swadeshi と称せらるる)

2) Gandhi. 前出 P. 225.

(SMH A…1) 10…30

ふ
り
し
ま
す
。
が
、
ク
ロ
ー
ズ
ア
ップ
で
見
ると
、
ア
ッ
ト
ホ
ー
ム
の
ベ
ン
チ
に
腰
掛
け
た
一
人
の
男
が
、
ス
ポ
ー
ツ
紙
を
広
げ
て
、
ア
ナ
ウ
ンス
に
耳
を
傾
け
ている
。
ア
ナ
ウ
ンス
は
、
ア
ッ
ト
ホ
ー
ム
の
ベ
ン
チ
に
腰
掛
け
た
一
人
の
男
が
、
ス
ポ
ー
ツ
紙
を
広
げ
て
、
ア
ナ
ウ
ンス
に
耳
を
傾
け
ている
。
ア
ナ
ウ
ンス
は
、
ア
ッ
ト
ホ
ー
ム
の
ベ
ン
チ
に
腰
掛
け
た
一
人
の
男
が
、
ス
ポ
ー
ツ
紙
を
広
げ
て
、
ア
ナ
ウ
ンス
に
耳
を
傾
け
ている
。

くめた「印度を英国化し又は英国の支配下に維持するは不可能である。印度の欲する所は印度的たることである」と。[1]

要之、植民地に於ける社会群の接触は一方の他方を絶滅せざるは駆逐せざる限り、同一地域内に於ける共存共存の年月を重ぬるに従い、相互的なる経済的社会的交情も接近に移り、一の有機的社会に統一統合せらるゝに至るべき傾向を有する。而して諸社会群の相違的社会の政治組織の存在は後近似し、且つ植民地社会の政治的主的に発展し、衣服被衣服の事実に基く階級的支配関係が早く姿を没せる植民地に於ては融合的因子意識の発達は比較的速かであり、之に反動ある矛盾の植民地に於ては分裂抗争の比較的長く継続するであらう。就中雑種社会的強度の制に基く有機的結合の效力を減殺する最大の要素である。社会的経済的生活に於ける相互的依存利用関係は植民者と原住者とを有機的に結合するに資して有力である

(5M印 A…1) 10…50

1) Bryant, Gandhi and Indianization of the Empire. 1924. P. 223-224.

植民政策

の反撥を招くであろう。花卉栽培者は、自分の活動が他の植民地的活動と共通の性質を有し、植民地的活動の一部であることを知り、抗議運動は、植民地的活動の一部であることを知り、植民地的活動の一部であることを知り、植民地的活動の一部であることを知り

E N D

REEL No. B-012

琉球大学